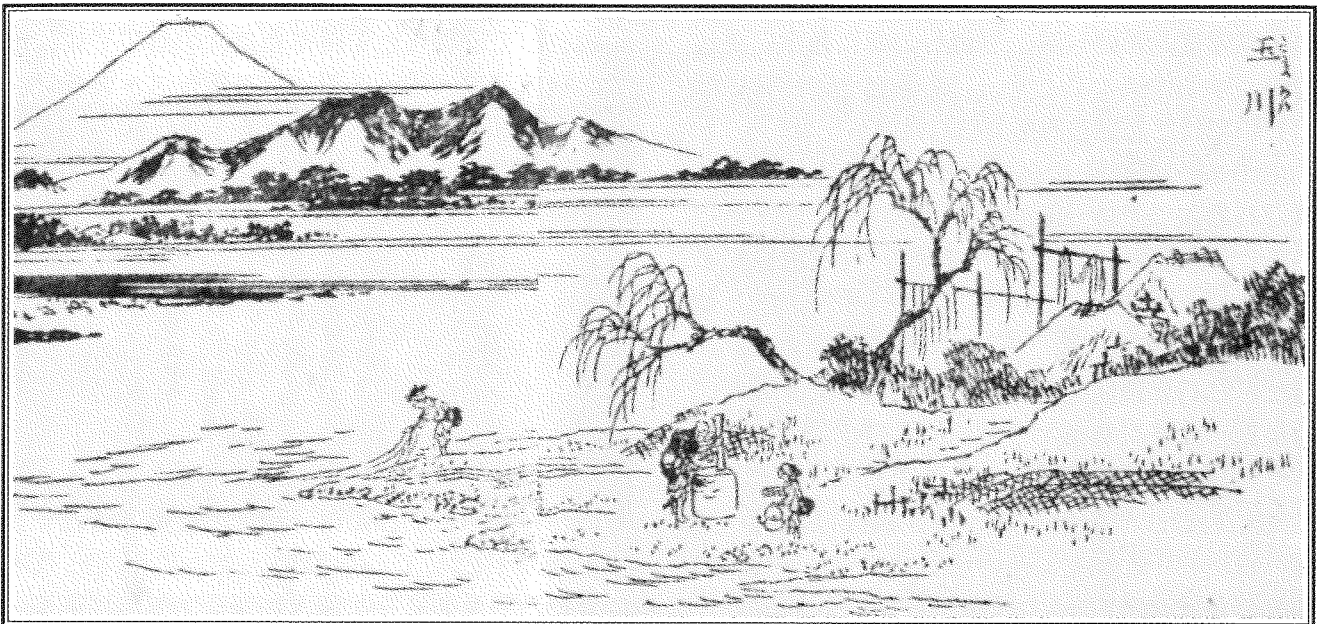


あるむぜお106

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 106

2013年12月20日



『江都近郊名勝一覽』

目次

- 1-2 多摩川と府中
 - ③歌枕としての「調布玉川」
- 3 展示会案内
 - ボランティアによる歳時記展 神酒口&消防のむかし
- 4-5 ノート アイソン彗星来る！
- 6 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物
 - ⑪野村瓜州
- 7 最近の発掘調査
 - ちょっと一服！甲州街道府中宿
- 8 連載 天文・宇宙の最新動向
 - ③電波で宇宙を見る アルマ望遠鏡（その1）

多摩川と府中

府中に暮らす人々は、昔から多摩川と深い関わりを持ち、多摩川をとおして、いろいろな動植物とつながってきました。多摩川と府中の織りなす諸相を4回シリーズで紹介します。

③歌枕としての「調布玉川」

この「玉川」の絵は、江戸時代末の弘化4年（1847）刊行の『江都近郊名勝一覽』（挿画は歌川広重、当館蔵）に掲載されたものです。河原の柳の木の下には、3人の女性がいます。餅つき洗濯もしているのでしょうか？

多摩川と府中

③歌枕としての「調布玉川」

多摩川の名前は早くも奈良時代の『万葉集』に登場します。「多摩川に さらす手づくり さらさらに 何そこの娘の ここだ愛しき」。武蔵国の東歌のなかの一首で、多摩川における布晒しの作業になぞらえて、少女への切ないまでの愛情を詠った名歌です。布晒しは、手織りの麻布を水に浸して白くする作業のことで、この歌はその作業に際して歌われた民謡とも考えられます。

この1300年前に作られた歌は、その後も詠い継がれたようで、「玉河に さらす手づくり さらさらに 昔の人の 恋しきやなぞ」（『拾遺和歌集』）、「玉河に さらす手づくり さらに世に たのお日影の あはれ過行く」（『建保名所百歌』）など、これを踏まえた歌も作られました。和歌に繰り返し詠まれた名所が歌枕ですが、このようにして多摩川は「調布玉川」という名称の歌枕として知られるようになりました。調布は、調（ツキ=貢納物）としての布の意ですので、多摩川は、朝廷に納める布生産の作業（布晒し）場面をイメージさせる名所になったのです。

歌枕の「調布玉川」は江戸時代以降、絵画に描かれたり、工芸品のデザインにされたりすることも多くなります。また、全国各地に「玉川」の名前の歌枕が作られ、「六玉川」としてまとめられることもありました。それぞれの「玉川」の景観にはお決まりのキー・ワードができ、例えば「井手玉川」（京都府）なら、季節は春で山吹が咲き誇り、本歌を詠んだ藤原俊成と思しき馬上の貴人がいて、「三島玉川」（大阪府）では夏の村里に卯の花が咲いて、「野田玉川」（宮城県）では冬の風に松の木がなびき千鳥が舞っているという具合です。

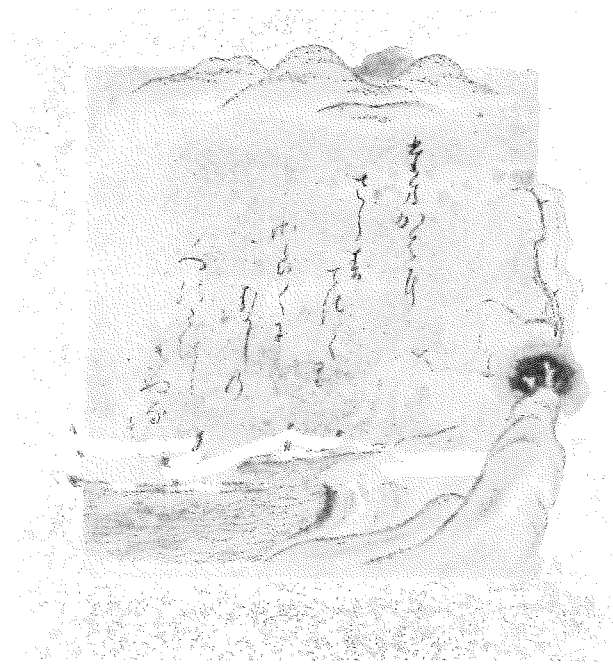
「調布玉川」はもちろん布晒しが中心ですが、小道具には布を柔らかくするための作業に必要な竝杵と臼が加わる場合があります。また、他でもない武蔵国の多摩川であることを示す富士山や、柳の木が描かれることも少なくありません。表紙写真の『江都近郊名勝一覽』はその典型的な絵柄

と言えるでしょう。さらにキー・ワード化を進めた究極の表現が本ページの『六玉川和歌色紙帖』（当館蔵）のなかの一葉です。作業中の人物の姿をも消して、干した布と柳だけで「調布玉川」を示しているからです。

そもそも『万葉集』東歌に詠われた布晒しは、租税としての調布を生産するためのものです。律令の規定で成人男子に課された調布は、実際には各家で調達することが難しく、国府の工房などでまとめて生産されたと考えられています。武蔵国府の近くを流れる多摩川では、納期に間に合わせるべく、当時の言葉で「布手」（木簡記載）「布晒す東女」（万葉歌所出）と呼ばれる人たちが作業に勤しんでいる光景が見られたことでしょう。

このようにして、多摩川と言えば布晒し、布晒しと言えば多摩川というイメージが長い間にできあがっていきました。歌枕の「調布玉川」は、武蔵国府が府中にあった古い時代の歴史を懐古する「原風景」として、地域の人たちに伝えられていったと言えるのではないのでしょうか。

（小野一之）



『六玉川和歌色紙帖』

たまかはに さらすてつくり さらさらに
むかしの人の こひしきやなぞ

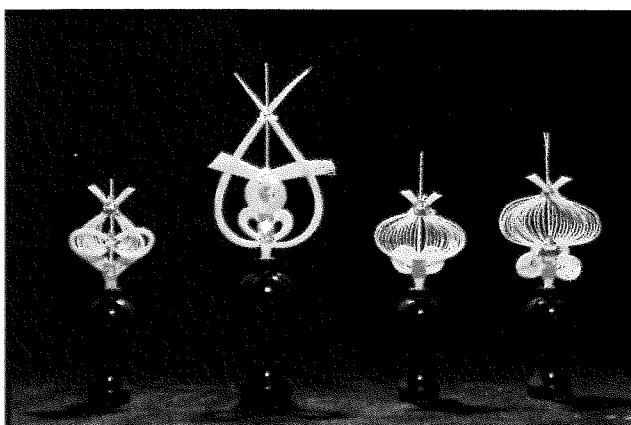
ボランティアによる歳時記展

神酒口 & 消防のおかし

2013/12/14 (土) ~ 2014/1/30 (木)

会場：本館2階常設展示室

観覧無料



さまざまな神酒口

年末になると、新年を迎える準備を多くの家で行います。府中周辺でも、大掃除、しめ飾りや餅の準備のほか、神棚などに供えるお神酒徳利に挿す「神酒口」（オミキグチなどとも呼ばれる）を新しく交換します。

神酒口はお飾りの一種で、神様へのお供えです。竹や木、紙などでつくられ、さまざまな形状があります。2本で一对になっており、1年ごとに新しくすることが基本ですが、金属や木でできたものを長年にわたり使う場合もあります。

府中周辺では竹でつくられ、宝船や万年青など、縁起の良い形に細工した神酒口が多く見られます。しかし最近では繊細な制作技術を伝承する職人も減り、神酒口自体も飾られることが少なくなっているようです。

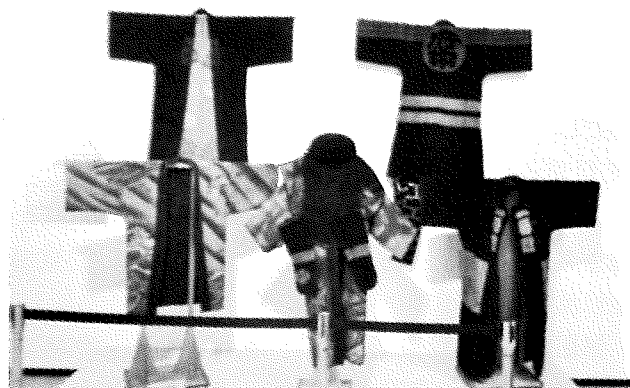
ところで、神酒口を交換するあわただしい年末年始は空気が乾燥しやすく、火事がよく起こることも知られています。年始には消防出初式も盛大に行われます。そして、毎年1月26日は「文化財防火デー」です。1949年（昭和24）のこの

日、奈良・法隆寺の金堂が火災に遭ったことから、1955年に制定されました。文化財を守るための消防訓練もこの頃各地で行われます。

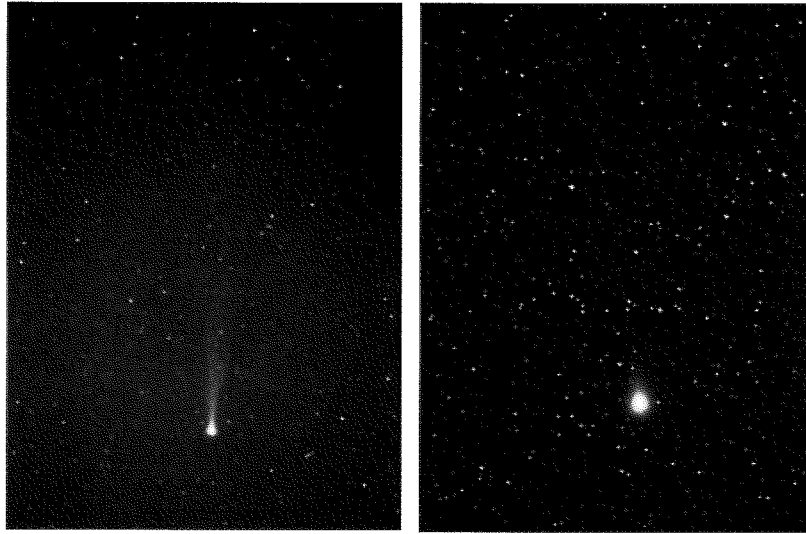
こうしたことにちなみ、当館では年末年始を安心安全に迎える願いをこめ、さらに防火意識を高めることの一環として、館所蔵の神酒口とおかしの消防道具をあわせて展示する機会をこの時期に設けています。

この展示は博物館ボランティア資料整理班が結成された2001年（平成13）より継続して行われています。「たとえ短期間でも、収蔵庫にある多くの資料をできるだけ展示し、活用しよう」という目的のもと、ボランティアメンバーと学芸員で相談、吟味しながら構成しています。ここ数年は常設展示室の一角を借りて展示していますが、来年の常設展示室リニューアルに伴い、同場所での展示はこれで最後となります。

この機会に府中の年始を彩る神酒口の数々、そしておかしの消防道具について知っていただければ幸いです。
（佐藤 智敬）



むかしの火消し装束・消防半纏の展示



アイソン彗星（左）とラヴジョイ彗星（右） 撮影者：本間隆幸

NIKON D3200 300mmF2.8 ISO800 45s で撮影

▼ はじめに

2013年（平成25）は彗星イヤーだと言われ、春にはパンスターズ彗星が、晩秋から初冬にかけてはアイソン彗星が話題となりました。

アイソン彗星は、2012年9月21日に国際科学光学ネットワークの40cm反射望遠鏡によって発見されました。その後の確認観測で彗星と確定され、「アイソン彗星（C/2012 S1）」と命名されました。アイソン（ISON）は、国際科学光学ネットワーク（International Scientific Optical Network）の略称です。

また、2013年9月7日にはオーストラリアのアマチュア天文家テリー・ラヴジョイ氏が新彗星のラヴジョイ彗星を発見しています。

これらの彗星は、どのような天体なのでしょうが、また彗星と流星群にはどのような関係があるのでしょうか。

▼ 彗星とは

彗星は、どこからともなく現れ、通常の星と違って、淡くぼおーっと広がった天体として見わかります。

彗星の本体は核と呼ばれ、水を中心とした氷や砂粒のような塵でできていて、よごれた雪だるま

にたとえられます。太陽に近づくと、熱せられた氷が蒸発し、ガスと塵が核の周りに球状に広がります。これをギリシャ語で髪を意味する「コマ」と呼びます。さらに、ガスは太陽風に流され、太陽と反対方向に延びる「イオンの尾」になります。塵は太陽の重力と光圧によって、太陽と反対方向に、やや彗星の軌道に沿って延びる「ダストの尾」になります。このように2本の尾ができることから、彗星は「ほうき星」とも言われます。

▼ アイソン・ラヴジョイ彗星の軌道

彗星は、楕円の軌道で太陽への接近を繰り返す周期彗星と、放物線や双曲線の軌道で進み、太陽に一度しか接近せず、二度と帰ってこないものに分けられます。

さらに周期彗星は、ハレー彗星のように、太陽をめぐる周期が200年以内の短周期彗星と、パンスターズ彗星のように200年以上の長周期彗星に分かれます。短周期彗星は海王星の外側に広がるカイパーベルト（小惑星帯）から、長周期彗星はそれよりも遠い太陽系を球状に囲むガス状物質の「オールトの雲」からやってくると考えられています。

彗星の軌道の形は、離心率によって決まります。

これを出す計算方法は複雑なので、ここでは省略しますが、この値が0だと円、0より大きく1より小さいと楕円になります。この際、1に近いほど形は扁平となります。また、1だと放物線、1より大きいと双曲線となります。

アイソン彗星とラヴジョイ彗星の離心率は、1.0000019と0.9982944なので、アイソン彗星の軌道は双曲線、ラヴジョイ彗星は楕円となります。ラヴジョイ彗星の値は非常に1に近いので、かなり扁平な楕円を描き太陽のまわりを巡ります。この周期は、楕円の形が扁平になればなるほど長くなり、ラヴジョイ彗星の周期は1万年以上になります。

▼ 太陽への接近と地球への接近

アイソン彗星とラヴジョイ彗星は2013年11月と12月にそれぞれ太陽に最も接近します。その時の太陽と両彗星の距離は、アイソン彗星が約120万km、ラヴジョイ彗星は約1億2000万kmです。アイソン彗星の距離は、太陽の直径よりも小さく、この彗星が太陽にかなり接近し、かすめるように通過していくことがわかります。

このように太陽に極端に接近する彗星をサングレーザーといいます。サングレーザーは普通の彗星に比べ、かなり太陽に近づくので、通過前後にその影響を大きく受け、明るくなることが期待されます。しかし、影響が大きくて本体が分裂・崩壊する場合があります。

アイソン彗星が最も太陽に近づいたのは11月29日でした。これにより、さらに明るくなるか、それとも崩壊してしまうのが注目されていましたが、太陽観測衛星の観測によると、残念ながら崩壊してしまいました。崩壊しなければ、12月27日頃に地球に最接近し、明るくなったアイソン彗星を見ることができるとは思われていたが、ど

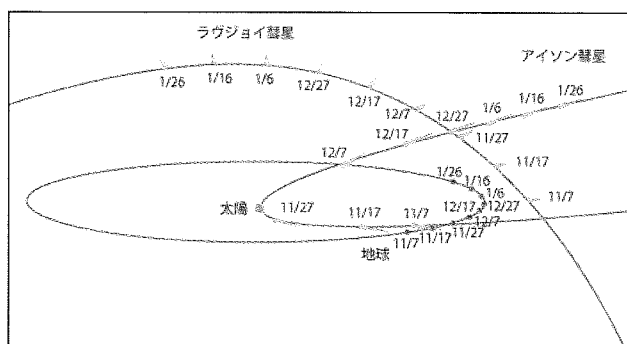
うやら机上の空論となってしまったようです。

一方、ラヴジョイ彗星は11月中旬以降地球に接近し、見えやすくなっています。冒頭の写真は、2枚とも富士山麓で撮影したもので、アイソン彗星は11月16日AM4時58分、ラヴジョイ彗星は11月13日AM4時24分の姿です。アイソン彗星は、もう見ることが叶いませんが、ラヴジョイ彗星は、明かりの少ない空気のきれいな場所なら、1月初旬まで双眼鏡で見ることができるといいます。

▼ 彗星と流星群~アイソン彗星は流星群になるか~

ところで、彗星から放出された塵は、流星群となります。塵は砂粒より大きいものから顕微鏡でなければ見えないものまでさまざまです。小さいものほど太陽の光圧の影響を受け、彗星本体から遠ざかります。流星となるのは、本体からすぐには離れない大きさの塵で、太陽に何回も接近を繰り返しながら、長い時間をかけてその彗星の軌道上に広がります。その軌道がたまたま地球の通り道と重なると、これが流星群となり、私たちはたくさんの流れ星を見ることができるといえます。

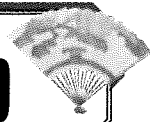
それでは、アイソン彗星は流星群になるのでしょうか。FAS府中天文同好会会長の佐藤幹哉さんの研究によると、アイソン彗星のように一度しか太陽に近づかない彗星は、流星のもととなる大きめの塵が、本体から離れて軌道上に広がることはありませんので、流星群にはなりません。しかし崩壊すると、広がった欠片の一部が再び地球の軌道に近づき、交差して流星群となることがあります。アイソン彗星の場合、欠片が地球の軌道に近づくのは、少なくとも数百年以上先のことで、地球の軌道と交差するかどうかは予測できないのが現状です。



アイソン彗星・ラヴジョイ彗星と地球の軌道

最後に、2014年の彗星の展望をお話しします。来年は今のところ、8月末に太陽に最も近づくパンスターズ彗星（今年の春のパンスターズ彗星とは別の彗星）が、5等星まで明るくなるという予報が出ているだけで、肉眼で見えるほど明るくなる彗星はありません。しかし、ラヴジョイ彗星の例もあります。明るくなる彗星が人知れず太陽に近づいているかも知れません。

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物



⑪ 野村瓜州

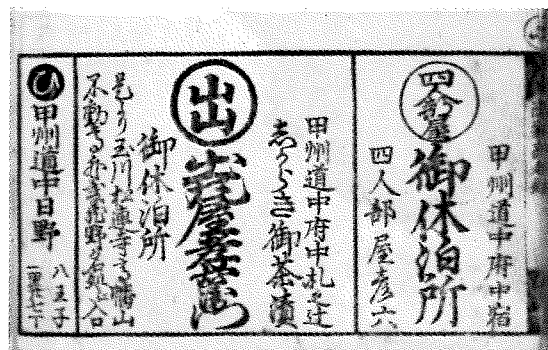
江戸時代の紀行文で、しばしば府中宿の旅籠屋として登場するのが「四人部屋」です。明和4年(1767)に大田南畝が著した『三贅余興』や、文化元年(1804)に俳人の露庵有佐が記した『玉花勝覧』、御三卿清水家の家臣・村尾正靖の『嘉陵紀行』や江戸小石川の隠居僧・十方庵敬順の『遊歴雑記』にも名前を見ることができます。

「四人部屋」というのは変わった屋号ですが、この由来には諸説あります。他所から府中宿へ出てきた4人が商売を始めただけでも、この旅籠屋を営んだ者しか残らなかったことによるという説や、宿泊した親子4人連れの坂東巡礼のうち、1人を養子にしたことに起因するという説です。

今回紹介する野村瓜州はこの旅籠屋の主人で、通称を六郎右衛門といたしました。生まれは元文元年(1736)で、文化8年10月27日に亡くなっています。学のある風流人として有名で、和歌や狂歌、俳諧などを好む近隣の文化人が彼のもとに集いました。また、江戸から瓜州に会うために「四人部屋」を訪ねる人も多くいました。冒頭に記した大田南畝や露庵有佐も、その一人です。残念ながら、村尾正靖と十方庵敬順の来訪は瓜州の死後ですが、「四人部屋」の名が文化人の間に浸透していたものと思われます。

瓜州は10代から20代にかけて、元浜松藩主松平家の家臣で、番場宿の名主宅に寄寓して学問を教えていた藤井延陵や、儒学者・服部南郭の婿養子で漢詩人の服部仲英に師事し、30代には江戸でも名を知られた人物となっていました。

若き日の大田南畝が、友人3人と四人部屋に宿泊したのは、瓜州が数えて32歳の時です。南畝の目的は多摩川で遊ぶことでしたが、非常に書を好む主人がいるからと学友の立松懐之(狂歌師の平秩東作)に「四人部屋」を勧められたのです。彼らがついた時に瓜州は留守でしたが、机の上にはうずたかく積まれた書籍をみて、南畝



『甲州道中商家高名録』(複製)
文政10年(1827)刊行。宿場の旅籠屋や商家などを掲載したもの。右側に「四人部屋」の名がみえる。彦六は瓜州の養子。

の友人が思わず「わが輩なり、わが輩なり」と喜んだといひます。その後、瓜州の案内で多摩川の風景を堪能し、夜はともに詩を作りました。

瓜州と南畝は、それから40年あまりを経て再び相見えています。文化5年は夏から秋にかけて大雨が降り、関東一帯の河川の洪水対策が必要になりました。幕府の役人だった南畝は、同年末から翌6年にかけて、多摩川の堤防の巡視に訪れたのです。還暦過ぎの南畝と70歳を超えた瓜州は、昔を懐かしみ、命があつたら又会いましょうと約束をして別れましたが、それは叶わなかったようです。それから約3年後、彼岸へと旅立った瓜州の墓碑銘の撰文を南畝が担当しています。現在、高安寺にあるこの墓碑は、昭和34年(1959)に府中市の史跡に指定されました。

瓜州について、嘉永7年(1854)に歌舞伎の狂言作者・三升屋二三治が著した『浮世雑談』には、風流人で極めて酒家であり、江戸の洒落者や通人が、彼を知らなければ恥とばかりに四人部屋を訪れたとあります。また、江戸の文化や風俗に関するさまざまな著作を残した三田村鳶魚も、昭和14年に刊行された『江戸百話』の中で「四人部屋六郎右衛門」と題する一文を著しています。没してから後も、なお書物に登場していることから、当時の瓜州の知名度の高さを知ることができるのではないのでしょうか。

(花木知子)

最近の発掘調査

ちよつと一服!

甲州街道府中宿

宮西町2丁目 府中市ふるさと文化財課 荒井 健治



前ページの「知る人ぞ知る! 府中ゆかりの人物」でも紹介しましたが、江戸時代の終わりごろ、旧甲州街道に面した宮西町2丁目には、江戸の文人たちに親しまれた、「四人部屋」という旅籠屋がありました。

「四人部屋」は、市内の小学校に通う小学3年生に配られている『武蔵府中郷土かるた』の、「の」の読み札に書かれた「野村瓜州の四人部屋」のことです。当時「四人部屋」があったとされる宮西町2丁目の旧甲州街道沿いには、このかるたの標識が立っています。今回の調査はこの標識の東側隣接地、江戸時代から続く和菓子屋の敷地で行われました。

周辺の甲州街道沿いの調査では、街道に沿って宿場に関わる建物の柱跡が多数見つかり、その奥にはゴミ穴などが見つかるのがふつうです。今回の調査では、建物の柱跡が見つかる部分は壊されていましたが、奥のゴミ穴などが見つかる部分は残っており、調査地の北西隅からは、まさにゴミ穴であろうと思われる不定形の大穴が見つかりました。そしてこの大穴には、多量の割れた陶磁器片などが埋まっていました。大穴は、西側へ延びていたことから、あるいは「四人部屋」の敷地に及んでいた可能性もあり、どのようなゴミが出土するか興味が持たれました。

旅籠屋の場合、料理を出すことから、茶碗や皿、酒器などと同じものを揃えている傾向が見られます。しかし、今回のごみ穴出土品にはその傾向が見出せず、残念ながら旅籠屋のものではなさそうです。そのかわり、土瓶と湯飲みは、同じものがかなりの数出土しました。調査地は和菓子屋ですので、江戸時代、店先ないし店内で和菓子とともにお茶が供せられ、そのための土瓶や湯飲みが揃えられていたのかもしれませんが。

峠の茶屋ならぬ宿場の和菓子屋で、一時、旅の疲れを癒す旅人や、六社宮（現在の太國魂神社のこと）の参詣を終え一服する人たちの姿が想像されます。



『武蔵府中郷土かるた』の絵札



連載

天文・宇宙の最新動向



③電波で宇宙を見る、アルマ望遠鏡 (その1)

インタビュー：本間隆幸

今回は、アルマ望遠鏡について国立天文台チリ観測所の平松正顕さんにお伺いします。

Q.アルマ望遠鏡とは？

日本を含む20の国と地域が一緒になって作っている電波望遠鏡です。南米チリの標高5000mのアタカマ高地に、パラボラ



Q.なぜそんな高地に作るのですか？

アルマ望遠鏡が観測する電波は、水蒸気によく吸収されてしまいます。しかし、アタカマ高地は世界で最も乾燥している場所の一つで、空気が半分しかなく、電波を妨げる水蒸気が極めて少ないので、観測条件がとてもよいのです。

Q.電波望遠鏡とはどういうものですか？

普通の光の望遠鏡と違い、宇宙からやってくる電波をとらえるのが電波望遠鏡です。すばる望遠鏡やTMTでは、夜空に光る星が見えます。一方、星々の間に漂う雲のようなガスや、非常に小さい砂粒（塵）は温度が低く、 -260°C くらいです。極めて温度が低い物体は光を出しません。電波は出します。星々の間のガスや塵の雲の中で、何が起きているかを調べることは、光の望遠鏡ではできませんが、電波望遠鏡なら可能なのです。

Q.ガスや塵の観測から、見えるものは？

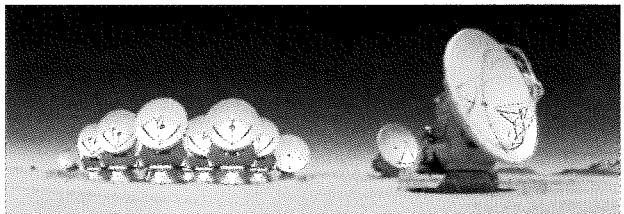
星々の間のガスや塵は、星や惑星の材料になっています。電波の観測から、これらが銀河系の中でどのように分布しているのか、その雲の中でどのように星や惑星が生まれてくるのかがわかります。それから、非常に遠くにある、巨大なガスの塊から銀河が生まれてくる様子も知ることができます。

Q.アルマ望遠鏡のすごいところは？

アルマ望遠鏡はこれまでの望遠鏡に比べて、細かいものを見る力（視力、分解能）、弱い電波をキャッチする能力（感度）が100倍くらいよくなっています。これまで電波が弱くて観測できなかった銀河、星、惑星の誕生について、詳しく知ることができるようになります。

Q.最近の成果を教えてください。

最初にアルマ望遠鏡の構想が始まったのが30年前です。10年前から建設が始まり、2011年（平成23）から科学的な観測が始まりました。そこから、いくつかの成果が上がっていますが、僕が一番面白いと思ったのは、へびつかい座の星の誕生を観測した結果です。これから惑星ができてくるような場所を取り巻いているガスから、初めて砂糖の仲間の糖類分子のグリコールアルデヒドが検出されたのです。生命誕生につながる有機分子が、惑星のできる前段階から既にその場所にあることがわかりました。この星の周りで惑星ができてくるまでの数千万年から一億年もの長い間に、糖類分子が化学反応を起こし、さまざまな複雑な有機分子、例えばアミノ酸の



アルマ望遠鏡 画像提供：国立天文台

ようなものができるのかもしれませんが。

さらにアルマ望遠鏡は、他の惑星形成現場にあるアミノ酸分子から出る、非常に弱い電波をキャッチする可能性もあります。もしアミノ酸が豊富にあるとしたら、惑星に降り積もって生命誕生の種になるかもしれないのです。

平松正顕 Hiramatsu Masaaki 国立天文台助教
略歴：2008年東京大学大学院理学系研究科天文学専攻修士課程修了
台湾中央研究院天文及天文物理研究所研究員を経て現職

寄付の御礼 内藤治氏（府中市住吉町）

公益財団法人府中文化振興財団へ博物館資料調査研究のため 金100万円 ありがとうございました